

論 文

# 長岡高専における英語多読実践 プロジェクト（その1）

田中真由美<sup>1</sup>・大湊佳宏<sup>2</sup>・土田泰子<sup>3</sup>

<sup>1</sup>一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

<sup>2</sup>一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

<sup>3</sup>一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

## INCORPORATING EXTENSIVE READING IN THE ENGLISH LANGUAGE CURRICULUM AT NAGAOKA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY

—PART 1—

Mayumi TANAKA<sup>1</sup>, Yoshihiro OMINATO<sup>2</sup> and Yasuko TSUCHIDA<sup>3</sup>

### Abstract

This paper reports the progress of the extensive reading project launched by the English language teaching staff at Nagaoka National College of Technology. The overall aims of this project are to develop a curriculum which incorporates extensive reading into the general English courses, and to examine its effectiveness through practical researches, in order to increase students' English proficiency and promote their autonomous attitude towards studying English. As an initial undertaking of the project, extensive reading is being conducted this year mainly in the English reading course for first-year students. The result of the first six-week extensive reading shows that the amount of students' reading depended on the teachers' guidance and support. It is suggested that teachers need to provide students with a wide variety of support to motivate them to read out of class, in order to cope with the time limitation for in-class reading.

**Key Words :** *extensive reading, curriculum development, learner autonomy*

### 1. はじめに

昨年度英語科が申請した「自律的英文多読活動実践」が、平成20年度重点施策経費に採択され、図書購入費（150万円）が配分された。本稿では、英語科が立ち上げた「英語多読実践プロジェクト」の概要と、プロジェクトの一貫として今年度前期に本科1学年で行った多読活動の途中経過を報告する。

### 2. 背景

ほとんどの高専で5年間の英語教育が行われているが、学年が上がるごとに英語の単位数が減少することや、大学進学を目指す高校生のように受験勉強に時間をかけることがないことが、高専生の英語力の低さの一因であると言われている<sup>1)</sup>。

本校の学生の英語力も低く、TOEIC-IPの4年生の平均点（留学生のスコアは除く）は、平成19年度では359点、平成20年度では324点であった。本校の学生の英語力の低さに関しては、単位数や受験勉強の

問題以外に、英語のインプットの絶対量の少なさも理由の一つとして挙げられる。本校においても、リーディング活動を主体とした1～3学年の本科共通英語科目は、90分の授業が週に1回しか行われず、50分ないし55分のリーディング活動を伴う授業を週3～4回行う高等学校と比べてかなり少ないため、学生が英語に触れる量を増やす工夫が必要である。英語科では授業で使用する教科書の他に、サイドリーダーやリスニング教材を自学自習用に採用してきたが、そのような取り組みは、大学進学を目標に掲げる高等学校でも当然行われており、高校生に比べて高専生が授業及び課題によって与えられる英語インプットの量は依然として少ない。更に英語のインプット量を増やすためには、サイドリーダー等の副教材使用以外の工夫も必要である。

### 3. 先行研究

#### 3. 1 多読の理論的背景

英語のインプット量を増やすための英語学習の方法として「多読」がある。「多読」(extensive reading)という用語は、1917年にPalmerによって用いられ、楽しみや情報収集のためにテキストの内容に注意を向けて次から次へと読むことを指し、これに対して「精読」(intensive reading)とはテキストの言語に焦点を当て、正確に読むことを目的とした読みである(深谷 2004: 67)<sup>2)</sup>。

多読の理論的背景としては、まず、言語習得の観点からKrashen (1985)<sup>3)</sup>がインプット仮説(Input Hypothesis)を唱え、理解可能なインプットを可能にする内容把握を中心とした多読の重要性を主張した。また、単語の認知的処理の研究からは、速く、正確な自動的単語認知力を養うには、多くの活字に触れる機会を与える多読が最も効果的な方法であり、更に、活字に音声があれば、単語の認知処理が促進されることが指摘されている(門田・野呂(編), 2001: 342-344)<sup>4)</sup>。そして、動機付けの観点からは、Day and Bamford (1980: 30-31)<sup>5)</sup>が多読ブックストラップ仮説(extensive reading bookstrap hypothesis)を提唱し、多読における最初の成功によって、第二言語で読むことができ、多読はやりがいがあり、楽しいものだとの発見し、このことによって積極的に第二言語で読む態度が発達し、動機付けも高まると主張している。

#### 3. 2 多読授業実践

近年多読は、中学校から大学まで様々な教育機関

で行われ、その成果が報告されている。とりわけ本校と類似のコンテキストを持つ他の高等専門学校での指導実践は注目に値する。現在、10校を超える高専が多読授業を実践しており、中でも豊田高専は継続的な多読授業によって、100万語の読書量がTOEICの40～50点程度の向上に寄与したと報告している<sup>6)</sup>。また、函館高専は多読に関するアンケート調査を行い、多読によって7割以上の学生が英語を読むことを楽しいと感じ、8割以上の学生が多読授業が好きで、今後も継続して欲しいと思っていると報告している<sup>7)</sup>。以上のように、多読授業は高専生の英語運用能力だけでなく、英語を読むことへの動機付けの向上にも効果があると考えられる。

## 4. 英語多読実践プロジェクト

### 4. 1 目的

本プロジェクトの目的は、多読の実践と研究を重ねながら、学生の英語力の向上と自律的な英語学習習慣の確立をめざしたカリキュラムを開発することである。学生が達成すべき具体的目標は、3学年までに50万語、本科卒業時までに100万語を読み、TOEICで400点以上取ることである。もちろん外部試験のスコアだけで英語力を測ることは難しいのだが、TOEICのような外部試験でより高い得点を取るとは、学生の就職や進学の際に役立つため、以上のような目標設定を行った。

### 4. 2 図書の購入と管理

配分された重点施策経費は、全て英語学習者用の段階別読み物(Graded Readers)と、英語を母語とする児童向けの学習絵本(Levelled Readers) 2,785冊の購入に充てた。



図-1 本校図書館に設置された多読用図書の書架

購入した図書の管理は本校図書館スタッフに依頼し、現在、**図-1**のように多読用の書架が設置されている。また、それぞれに本に、SSS英語学習法研究会が定めている読みやすさのレベル(Yomiyasusa Level, 以降YL)を記したラベルを貼ってもらった。YLとは、日本人学習者にとっての本の読みやすさを0.0-9.9までの数値で表したものであり、例えばYL 0.0の本は題名だけが英語で、その他は絵だけの絵本となっている<sup>8)</sup>。

また、教材選択の支援のために、語数とYLの数値のラベルだけでなく、**表-1**のように、YLに対応した識別シールを各本に貼ってもらった。

**表-1** 読みやすさのレベル別のシールの配色

シールの色	YL
赤	0.0-0.5
黄	0.6-0.9
青	1.0-1.9
橙	2.0-2.9
緑	3.0-3.9
桃	4.0-4.9
空	5.0-5.9
黒	6.0-6.9
茶	7.0-7.9
銀	8.0-8.9
金	9.0-9.9

#### 4. 3 多読を取り入れた授業の概要

多読を取り入れた授業は、今年度の4月に開始する予定であったが、図書の購入と整理に時間を要したため、6月に開始した。また多読用の図書の数が限られていることと、プログラム開始の初年度ということもから、今年度は複数学年で一斉に行うのではなく、主に1学年で行っている。

多読活動が行われている授業は、1年の「英語I」である。この授業は週1回90分間行われ、使用教材は、高等学校で使用される英語の検定教科書、リスニング教材、そしてサイドリーダーである。多読活動はシラバスにも明記されているが、授業の主たる活動は教科書本文の精読であり、多読は毎週必ず行うのではなく、指導時間に余裕がある場合に適宜行うものとして位置づけられている。したがって、毎回の授業で学生に本を読ませることは時間的に困難なため、授業時間外に図書館で本を借りて読むよう指導した。

#### 4. 4 具体的な多読の方法

採用した多読の方法は、易しい本から徐々にレベ

ルを上げていくSSS (Start with Simple Stories) 多読学習法である<sup>9)10)</sup>。この方式の特徴は、自分のレベルと好みに合った本を自分のペースでたくさん読めることであり、「100万語多読」とも呼ばれている。

また、SSS方式では、以下の多読三原則が掲げられている。

1. 辞書を引かない。
2. わからないところは飛ばす。
3. つまらなくなったらやめる。

「辞書を引かない」のは、読書の流れを止めないためである。単語の意味がわからず、本の内容が全く理解できないのでは読書にならないため、辞書を引かずとも読めるレベルの図書を選ぶ必要がある。また、未知語に出会い、わからない箇所があっても、わかるところをつなげて話の全体を理解することが大切である。しかし、それでもわからない部分が多く、内容理解に支障がある場合や、内容に興味を持たない場合は、無理をせずにその本を読むのをやめ、自分にとってよりふさわしい本を選ぶことが多読を続ける鍵となる。

#### 4. 5 多読活動の様子

授業内での多読活動は主に図書館で行われた。図書館に多読用図書が置かれていることが主な理由であるが、教室のような狭い空間で自分の席で1人で読むよりは、クラスメイトと本の情報交換をしたり、質問をし合うことが容易な環境の方が、読む楽しみを味わえると判断したことも理由の一つである。**図-2**の写真からもわかるように、写真左上に写っている2人の学生は一冊の本を一緒に読んでいる。



**図-2** 図書館での多読の様子

4. 6 読書記録

英語科で読書記録帳を作成し、日付け、タイトル、シリーズ名、YL、読んだ本の語数と総語数、評価、そして短い感想を書かせた。評価は、☆（おすすめ）、◎（よい）、○（まあまあ）、△（おすすめしない）、×（読んで後悔）の5段階評価である。感想は、一言でよいので必ず書くよう指導した。記録帳はページが足りなくなった場合に新しいシートを加えることができるよう、冊子の上部に穴をあけ、紐で綴れるようにした。図-3は、学生が実際に記入した記録帳の一部である。

no.	月/日	タイトル	シリーズ名	YL	総語数		評価	感想
					読んだ本の語数	総語数		
1	6/5	Reds and Blues	ORT1	0.1	37	333	◎	超簡単本
2	6/5	The Egg Hunt	ORT3	0.3	80	1113	◎	おもしろ
3	6/5	Nobody wanted to play	ORT3	0.3	79	1432	◎	想像が豊か
4	6/5	A Cat in the Tree	ORT3	0.3	79	1711	◎	おもしろ
5	6/5	The Rope Swing	ORT3	0.3	79	2148	◎	おもしろ
6	6/5	Big Feet	ORT1	0.1	41	289	○	結果予想は
7	6/5	Top Dog	ORT4	0.1	42	321	△	おもしろ
8	6/5	Presents for Dad	ORT1	0.1	49	280	◎	おもしろ

図-3 学生の多読記録帳の一部

記録帳は、学生が自分自身のためにつけることを第一の目的とし、読んだ語数が増えたり、読む本のレベルが上がったりすることの喜びや達成感を味わうことで、読む意欲を高める効果が期待できる。また指導の観点からも、記録帳があれば、教師が学生の進歩の状況を把握して、適切な助言を与えることが可能である。

4. 7 教師の役割

多読授業を行うにあたって、教師は「教えない」、 「押し付けない」、 「テストしない」ことが重要だと言われている<sup>9)10)</sup>。ここで言う「教えない」とは、「何もしない」ことではない。教師の役割は知識を伝達することではなく、学生の読書をよく観察し、記録帳を点検したりしながら、多読に問題を抱える者がいた場合に適切な助言を個別に与えることである。「押し付けない」とは、読む本を教師が決めるのではなく、学生自身に自分のレベルと興味に合った本を選ばせることである。また、読書が進まなくなった場合には、最後まで読ませるのではなく、違う本を読むよう指導することが必要である。最後に、「テストしない」というのは、読書が楽しく、自分のためになるような活動であることを妨げるような

評価は行わないということである。

多読を授業で行う場合、教師は以上の3点に注意しながら、できるだけ多くの本を学生に読ませるための工夫を行うことが必要である。今年度の前期に行ったあるクラスでの多読活動では、定期的に授業中に机間巡視で読書記録帳を個別に点検し、読書が進んでいない場合は、「もう～語読んでみよう」と身近な目標設定をしたり、宿題にしたりした。また、あるクラスでは、できる限り多読活動の時間を授業内に設けることで、多読の習慣形成の支援を行った。

4. 8 評価

多読活動を授業内で行い、宿題としても課しているため、評価をすることが必要となる。評価の方法は、読んだ本の総単語数<sup>11)</sup>（田澤，2005：80）やサマリーや読書記録の提出<sup>12)</sup>（高瀬，2005：87）などがある。読書量で評価すれば、高い評価を得るために、実際の読書量とは異なる結果を報告するという行為を引き起こす可能性がある。サマリー・ライティングのような課題は、行う学生にとっても、添削をする教師にとっても負担となり、多読が続かなくなる危険性がある。また、テストを行えば、多読が楽しみのための読書ではなく、テストで良い点をとるための活動になるかもしれない。高い評価を得ることも1つの動機付けではあるが、他者による評価のない状況では、自律的に英語を読む機会がなくなる恐れがある。

そこで、本校における今回の実践では、読書記録帳の記入と提出を評価し、英語Iの評価の内、「提出物（10%）」に入れることにした。この評価方法では、記録帳を漏れなく記入し、提出期限内に提出すれば評価され、読書量は問題ではない。しかし、評価が記録帳の提出のみでは、意欲的に多読を行っている学生の取り組みは成績に反映されない。そこで、各クラス内で読書量が顕著に高かった者数名は、英語Iの評価のうち、「その他の評価：言語活動への取り組み、授業態度など（10%）」で、高い評価を与えることとした。

4. 9 読書量の中間報告

表-2は、今年度6月半ばから前期期末試験までの約1ヶ月半の読書量のクラス毎の結果であり、表-3は、1学年全体の結果である。表-2のように、最小値58、最大値30,728と、他のクラスに比べて極端な数値が含まれているクラスもあるため、平均値だけでなく、中央値も示した。なお、学生が提出した読書記録帳に書かれた総語数を集計した結果であ

るため、記録帳が未提出の者のデータは含まれていない。

表-2 クラス毎の読書量 (記述統計)

クラス	A	B	C	D	E
<i>N</i>	39	41	40	37	35
<i>Mean</i>	3,383	2,790	4,352	3,731	1,243
<i>Median</i>	2,519	2,496	2,284	2,596	788
<i>Min</i>	949	1,171	58	492	99
<i>Max</i>	8,530	5,967	30,728	20,184	4,391
<i>SD</i>	2,106	1,357	5,883	3,716	1,226

表-2からわかるように、クラスE以外は、中央値が2,200語～2,500語程度である。クラス毎に多読活動や宿題の回数が異なるため、読書量に違いが現れたと考えられる。最低限の授業内での多読時間を確保したいところだが、授業内容の理解度に応じて授業進度がクラス毎に多少異なるため、「全てのクラスで最低～時間の授業内で多読活動を行う」という統一は難しい。クラスAやBでは、頻繁に多読の宿題を課して記録帳を点検したため、最小値が他のクラスに比べて高い。授業内で多読活動の時間が取れない場合や、多読活動を自発的に行えるようになるまでは、宿題にするなどして、読書をする機会を提供することが必要と思われる。

表-3 1学年の読書量 (記述統計)

<i>N</i>	<i>Mean</i>	<i>Median</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>	<i>SD</i>
191	3,135	2,221	58	30,728	3,536

表-3に示されるとおり、1年生は1人あたり2,221語(中央値)読んでいる。これは前期中間試験後から前期期末試験までの間の約6週間で読んだ量である。長期休暇や試験期間を除いた学年末までの期間、このペースで読み進めると、今年度の読書量は約7,000語にしかならない。多読を夏休みの課題としたため、今年度末までの読書量は更に増えると考えられるが、3年間で50万語読むためには、1年目に少なくとも10万語は読んでおきたいものである。現時点で最も読書量の多い学生は3万語以上を既に読んでいるため、10万語を達成すると期待できるが、そうでない大多数の学生には、今後、多読に関する指導の工夫が必要となる。

## 5. 今後の取り組み

### 5. 1 多読実践に関する研究

今年度前期に行った約6週間の多読活動に関して、学生を対象にアンケート調査を行い、結果を分析中である。今後も定期的にアンケートを実施することで、学生の意欲や態度の変化、ニーズなどを把握し、今後の指導の改善のための資料としたい。

また、アンケート調査や読書量と外部テストの成績の相関など、量的研究は多読の研究でよく行われているのだが、観察やインタビューなどによる質的研究はあまり行われていないため、今後は、学生1人1人に焦点を当てた研究を行い、多読が成功するための要因なども深く探って行きたい。

### 5. 2 多読実践の今後

今年度は主に1学年で多読を実践している。その他に2学年でも、多読を夏休みの課題とし、後期からは学生の様子を見ながら、多読活動を授業でも取り入れていく方針である。また、来年度は1～3学年の全学科の授業で多読を導入する予定である。その場合、多読用図書の冊数が問題となるが、今年度も校内重点施策経費で150万円が配分され、かつその他の校内プロジェクトからも資金が配分されるため、15クラスが行えるだけの図書を購入することができる。今後、全学年で多読を実践するには、更に冊数を増やす必要があるため、今後も資金の獲得に努めたい。

また来年度以降は、多読に「多聴」を取り入れる計画である。これは、多読用の図書に付属しているCDを、聞きながら読む活動である。本文の音声があることで、ただ聞くだけでなく、シャドーイング活動も取り入れることができ、リーディング力の他、リスニング力の向上も期待できる。来年度以降の取り組みに向けた多読及び多聴を取り入れた授業のシラバス開発も今年度の検討事項の一つである。

また、多読や多聴を来年度以降、多くの英語の授業で取り入れていくためには、学生への多読の目的や方法の基本的な説明を統一することも重要である。教師ごとに伝える内容が異なると、一貫した指導を継続させることができないため、多読指導に関する共通認識のためのパンフレットが必要である。パンフレットがあることで、教員間で多読の基本方針に関する共通理解が図れるだけでなく、学生にも的確に伝えることができる。パンフレットの作成は、今年度の取り組みを振り返り、成功や失敗を活かして行いたい。

### 5. 3 多読実践の広がり

今年度、長岡市が開校している「ながおか市民大学」の公開講座として、英語科では、多読に関する講座『「読む」ことで広がる英語の世界』を11月に開講する。これは、地域の生涯学習に貢献するだけでなく、本校の多読活動を活性化させるためにも、よい刺激となると考えられる。実際、多読図書の導入により学外利用者数が増加した豊田高専では、授業時間にも学外利用者が多読用図書を借りる姿が見られるという<sup>13)</sup>。社会人が同じように多読を行っていることと知ること、多読が自分のために行う自律的な行為であることを理解するきっかけになると期待できる。

#### 5. 4 図書館との連携

多読活動を成功させるためには、図書館スタッフとの連携が必要である。今年度は、レベルごとのラベルやシールの多読用図書への貼り付けを図書館スタッフに依頼した。英語科で立ち上げたプロジェクトではあるが、専任教員5名では、大量の図書を管理することは難しい。また、多読用図書の書架の配置や本のディスプレイ、紹介文の有無等が学生の読む意欲に影響を与える可能性があるため、今後、図書館スタッフに意見を求めながら、多読の意欲をより高める読書環境を検討したい。

#### 6. 最後に

本稿では、英語多読実践プロジェクトの内容と実践の中間報告を行ったが、多読だけが、学生の英語力を向上させるための取り組みではないことを最後に付け加えたい。CALL教材であるNetAcademy2 を利用した授業や、使用英語教材の変更、低学年を対象としたTOEIC Bridge-IPや英語検定試験の校内実施など、様々な取り組みを昨年度から行っている。今後多読も本校英語教育の特色の一つとなるが、その他の取り組みと合わせて、学生の英語力向上を目指したい。

(2009.10.5 受付)

#### 参考文献

- 1) 亀山太一：「高専英語教育」の現状と展望，文部科学教育通信，No.218，pp. 22-23，2009.
- 2) 深谷計子：多読の勧め，読解のプロセスと指導，津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編著），大修館，pp. 226-304，2002.
- 3) Krashen, S. D.: *The input hypothesis: Issues and implications*. New York: Longman. 1985.
- 4) 門田修平，野呂忠司（編著）：英語リーディングの認知メカニズム，くろしお出版，2001.
- 5) Day, R. R. & Bamford, J.: *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge University Press. 1998.
- 6) 伊藤和晃，長岡見晴：英語多読における多読語数と英語運用能力向上効果との関係，「多読・多聴授業研究会」資料，pp. 37-38，2009.
- 7) 竹村雅史：函館高専に於ける英語多読指導の試み—最終報告—，函館工業高等専門学校紀要，第41号，pp. 113-117，2007.
- 8) 古川昭夫他（編著）：英語多読完全ブックガイド第2版，コスモピア，2007.
- 9) 酒井邦秀：快読100万語！ペーパーバックへの道，ちくま学芸文庫，2002.
- 10) 酒井邦秀，神田みなみ（編著）：教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ，大修館，2005.
- 11) 田澤美加：先生と生徒とともに100万語多読を，酒井邦英，神田みなみ（編著），教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ，大修館，pp. 75-80，2005.
- 12) 高瀬敦子：ある私立高校での多読授業の挑戦，酒井邦英，神田みなみ（編著），教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ，大修館，pp. 82-89，2005.
- 13) 西澤一，吉岡貴芳，伊藤和晃：英語多読を通じた図書館の授業支援と地域貢献，論文集「高専教育」，第31号，pp. 808-814，2008.